

## 61. 金言:「和解こそ真の勝利」=西川恵

毎日新聞 2012年04月27日 東京朝刊

<kin-gon>

震災と原発問題と政局の報道で、しばらくメディアの表舞台から姿を消していた歴史和解について考えさせるニュースが英国発で流れてきた。

日英の和解に尽力してきた元英兵、フィリップ・メイリンズ氏が今年9日亡くなり、24日、故郷バーミンガムで葬儀が営まれた。両国関係者約100人が参列したという。92歳だった。

日英間の歴史問題は、主に大戦中の日本軍の英兵捕虜の処遇をめぐるものだった。捕虜になった英軍兵士は約5万人。うち約25%が抑留中に重労働、栄養失調、病気などで亡くなった。この体験は戦後、英国内で強い反日感情を巻き起こし、「残虐な日本人」「国際ルールを守らない日本」といった偏見が再生産されていた。これが変わり始めるのが80年代だ。

サッチャー政権の日本企業誘致と人的交流は、ステレオタイプの日本人像を後退させる一方、両国の民間レベルで和解に向けたさまざまなイニシアチブが生まれる。その一つがメイリンズ氏だった。

同氏は対独戦線で多くの部下を失い、その後、ビルマ戦線に投入された。待ち伏せ攻撃で22人の日本兵を射殺した時、「彼らの母親や恋人たちはどんなに悲しむか」との思いにとられる。「和解こそ、かつて敵だった者双方にとって真の勝利だ」という信念はこの体験がベースにある。

同氏は英政府に対しても「誤った作戦で国民を危険な目に遭わせた責任がある」と補償を求めてきた。2000年、英政府は要求を入れ、元捕虜の生存者に1人1万ポンド(当時約180万円)を支給した。大戦以降の英軍死者を追悼する英中部の国立追悼森林公園の一角に01年、「和解の森」を造成したのも同氏だ。日本からも寄付を募って桜やオークの苗木を植えた。「戦争を忘れず、和解と再会の場所を」との考えからだ。

来日した時、こんな言葉を残している。「世界第2の経済大国になった日本はその業績を誇りに思ってください。過去を隠す必要はありません。過去の問題にオープンに余裕をもって接してほしい。それが信頼と友情を勝ち取る一助になります」

同氏と個人的な交流があった山梨学院大学の小菅信子教授によると、同氏の最後の夢は「和解の森」に、広島に被爆したがれきで原爆碑を造ることだった。戦勝国で原爆犠牲者を追悼する記念碑は初めてで、広島市からOKが出た直後に亡くなった。今年8月、除幕式が行われる予定だ。

日英の和解プロセスは歴史和解の一つのモデルといわれるが、同氏もこれに大きく寄与した。(専門編集委員)(傍線:本稿編集者引用)

### 吉田祐起コメント;

ヒバクシャの立場にあって主張し続けるのが「原爆投下国と被爆国の和解」です。詳細は下記の拙著をご覧ください。意外とヒバクシャ間で論理されていない問題です。

[核兵器絶滅実現へのヒバクシャ使命——人類史上初の原爆投下国とヒバクシャの「和解」へのコンセンサスづくり](#)

<http://www.a-bombsurvivor.com/contents/2010.3.1.secondtestimony.reconciliation.jpn.pdf>

Back to the Column;

<http://www.a-bombsurvivor.com/internetinformation/internetinformation.html>